

---

# キオとルク

yasu1980

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キオとルク

### 【Nコード】

N9707G

### 【作者名】

yasu1980

### 【あらすじ】

カラスのキオとルクは迷いカラスを見つけたのだが…

キオはルクと一緒に生ゴミをあさっていた。

「なんでこんなうまいものを捨てちまうのかな」ルクはピザをつつきながら言った。

「お腹がいっぱいだからだろう」

「取って置けばいいのにな。そういう機械もあるんだろう？冷蔵庫っていうやつ」

「さあね。ともかく、捨ててくれるから僕らも生きてけるんだ、文句は言えないだろ」キオが言うと、まあなとルクがうなずいた。

「もう行こうよ」キオが羽を広げると、

「ひとつ飛びといくか。今日は良い空だ、空気も澄んでる」二人は舞い上がる。ゴミ置き場も、人間も、建物も、みるみると小さくしぼんでいった。

今から10年以上前になる。二人の出会いは酷いものだった。ルクは実の兄弟を食い殺したほどのワルだったので、キオが愉快に散歩をしていると、有無も言わず喧嘩を仕掛けてきた。

「よお、チンポ野郎。3秒くれてやるから、すみませんって100回言え」ルクは鋭い独眼で睨む。

キオは無視してその場を去ろうと、速度を上げた。

「おいクソつたれ。殺すぞ」ルクは執拗にインネンをつける。キオは速度を落とす。

「君はルクだね。噂は聞いているよ」悪態をつくルクに、キオは力強く言った。

「そつだ、ビビったか？」

「僕を殺して何の得があるの」その言葉に、ルクは威嚇の声で返す。キオは冷静に、

「ほんとはみんな仲間になりたいんじゃないかい」ルクはギョッ

とした。二人はしばらく静かに平行して飛んでいた。と、

「俺はまるで悪魔扱いだ。いまさらどうなる」

「それなりのことをしたんだもの、そうも思われるさ」

「だから悪さしてるんだ。俺が連中にしてやるのはそれだけだ」ル  
クはわざとらしく陰険な口調で言う。

「君がすべきことは悪さじゃないよ」

「なんだってんだよ、牧師にでもなれってか？」ちやかしたように  
ルクが言う。

「君は極端だね、そんなんじゃないよ。みんなにきちんと謝ること  
だよ」キオはやさしく言った。

「ふざける、あんな奴らに頭下げるくらいなら、死んだほうがまし  
だ」ルクは興奮して息も荒い。

「じゃあ君は死ぬまで、そして死ぬときも、ひとりぼっちだ」と、  
きつい言葉を受けたルクは、叫びながらそこから遠ざかって、雲に  
消えていった。

そんな回想をしていると、

「おい、キオ。あれは誰だっけ」ルクはくちばしで指す。

「分からない。群れからはくれたんだろう」見慣れないカラスだ。

「行こうぜ」ルクが近づいていった。

「よお、散歩か？」彼は明らかにおろおろしている。

「ここどこですか」今にも泣き出しそうな彼。

「うーん、代々木上原あたりだろう。ああ、あれが明治神宮だから」

「そんなこと言ったって…」

「ここらへんはサムリの縄張りだ。サムリ一族に属しているのだね」  
体を迷子の彼の横につけ、キオが尋ねる。はい、と彼はうなずく。

「こわいよ。もどりたいよ。連れてってください」辺りをきよろき  
よると落ち着きがない。

「とは言ったって、サムリの野郎んとこの奴だからなあ。本当は食  
い殺すつてのが筋つてもんだ」ルクが怖い口調で言うと、彼は動揺

を隠せない。

「ルク、いいかげんに怖がらせるのはよせよ」「へいへいと引き下がるルク。」

「でも、確かに連れて行くってのは難しいな」

「ああ。うかつに入り込んだらこっちが食い殺されちまう」

「声が届くところまで連れていこうか」キオが彼を見ながら言うと、彼は嬉しそうに鳴いた。が、ルクが言う。

「鳴き声だったってコイツのものなんてたかが知れてら。そうとう近づかなきゃ意味がねえぞ。それに、一緒にいるとこ視られたら」

「間違いないくこの子はスパイとみなされる」キオは静かに言う。

「そして食い殺されてジ・エンドだ。めでたしめでたし」ルクがまたふざける。

「僕たちの一族に出会うと問題があるの？」迷子は不思議がる。と、ルクが、

「なんかねえ、ボクを焼き鳥にしたいんだって。サムリ大魔神がねえ。こわいこわい」

「簡単にかかわり合えないのは本当だよ。ともかく考える必要があるな。飛び話も落ち着かない。ひとまず…“ユカリ”に行こう」

「そこしかねえもんなあ。他んとこ全部潰されちったから…」、不安そうに震える迷子。

「ぶるぶるしてんじゃねえよ。ほら、ついて来い」

ルクは彼に軽く体を当てた。三人は拠点”ユカリ”へと飛ぶ。しばらくして河川敷が見えてきた。蒼く澄んだ空は昔も今も変わらない。「ところで、不意打ちは無しだぜ」ルクがおどけて言う。

それはキオがルクにインネンをつけられて日もないころだ。

澄んだ空の下、とある河川敷。列車は鉄橋を渡る。キオはこの風景が好きだった。人間たちは笑い遊ぶ。すぐそこ、ゆつくりとタバコを吹かし、娘の仕草を見守る父親。離れて、そこには見守るものがない少女。キオは、実は彼女を見守っている。こんなに幸せなこ

の場所に、その少女だけは切ない。いつもその子はチョコレートのお菓子を食べて、なくなると帰る。キオは行く先を追わない。ただ、この河川敷で、その少女がその切ない思いを、この河へ流すことを、それだけは身守りたかった。

愉快な河川敷、一人ぼつちの少女。見守るキオ。すると黒いものが少女を襲う。少女は手にあるはずのものがなくことに戸惑う。キオは黒いものを追う。

「腹が減ってはゴミは漁れぬってもんだ」愉快そうに旋回しているその独眼のカラスはルクに違いなかった。激しく怒りが込みあがる。狙いを済ましキオは渾身の力でルクに体当りをする。ルクの啞えていたお菓子の袋は中身もばらばらと吹き飛んだ。

「いてえなこの野郎！」そう言うルクにまた一撃。喧嘩慣れしているルクは攻撃を受けながらも体制を整える。襲い掛かるキオの攻撃をすりりとかわし、下にもぐりこんで一撃。腹の辺りに激痛。血液が流れている。ルクがバランスを崩したキオめがけ重い体当り。間合いを取る二人。キオが他者に殺意を持ったのは今が初めてであった。何度もの交戦で両者とも傷だらけである。

「てめえ殺してやる。不意打ちはクソのやることだ。この臆病野郎」「君は弱い」痛みに耐えながらキオが言い放つ。

「全く根拠がないな。俺は強いぜ。飛んでられるのがやっとみてえな奴がなに言ってるんだよ」鋭い目つきのルク

「君は死んでも泣いてくれるものはいない。苦しみ傷ついて、君に助けを求めるものもない」痛みをこらえながらもはっきりと言うキオ。

「だから何だっつてんだよ」ルクが突っ込んでくる。キオも迎え撃つ。互いの攻撃が互いに襲い、激突の後、二人共々地に落ちていく。意識は遠のく。

キオとルクは壮絶な戦闘後、地面に落下していた。そしてどれ程経っただろうか。二人に意識が戻る。

あまりにも心地よいので、死んでしまったのだらうと、キオは思った。

やたら痛いので、けんかに負けたのだと、ルクは思った。

「てめえ、おとなしい顔してやがるわりに、ずいぶんと凶暴じゃねえか」ルクは隣に横たわっているキオに、力なく言う。

「時と場合によってはね」と、キオ。

「でもよお、さっきのはフェアじゃねえよ。なんせ、理由のねえ不意打ちだもんよ」

「君はあの子に不意打ちをした。フェアじゃないのは君も同じだ」

「馬鹿野郎か？人間あいてに不意打ちもクソもあるかってんだ」というルクのささやきも、傷ついていなければ、相当な迫力をもっていただであらう。

「てめえ、さつきからやけに落ち着いてしゃべりやがって、痛くねえのか？」

「感覚が麻痺してる」

「おまえ、やべえぞ」ルクがハツとする。

「死ぬかもしれない」

「畜生め。たかがガキのためにどうして…わからねえよ」眼を閉じて黙り込んでしまったキオに言うが、返事はない。ルクがふと、自分の身体を見てみるとハンカチが巻きつけられていた。

「誰かが手当てしたのか。どおりで出血をふせいでいやがる。死ぬのは俺のほうなのに」

ルクは初めて、心の底から、自分が悪いものであるということを感じさせられた。“罪悪感”と、いうものを。しばらく呆然としていると、少女が走ってくる。両手にいっぱい、トマトやらパンやら、包帯やら傷薬やらを持って。

「畜生め。てめえが命はった訳、少しわかりやがった」ルクはキオに、そうささやいた。

ルクは視線をハンカチから迷子に向けた。

「いいかクソ坊主。てめえはクソ純血なんだよ。糞サムリの直系。どういふ事か分かるか？」

「言葉づかい悪すぎ。もつと優しく言えないの」「リリスがルクを睨む。

「君は14番目の息子だ。サムリは20の子がいた。そのうち生きているのは僅か5。女が3で男が2。そのうちのひとりが君なんだ」「よく知ってますね。さすがキオさんだ」「パルは尊敬のまなざし。

ルクは面白くないので負けじと、

「サムリは頭のいい奴で、むやみにガキをつくらない。そのかわり、生まれてきた野郎を心血注いで磨き上げる。だが、例の“カラス狩り”だ。偶然にも奴らの拠点と同時に焼き尽くされた」とすると、迷子、つまりサムクが声を震わせ話し出す。

「兄さんや姉さんが、みんな、炎に。みるみる炎が…」

「これが本当の“やきとり”ってやつだ。安そうだな1本いくらだらうか…」

「今まであんたが言ってきたなかで最低の冗談よ。この子の悲しみを笑い話にするなんてあなたって人は…」怒り心頭のリリス。ルクのちやかしで泣き出すかと思われていたパルが、

「喧嘩しないで。悪いのは僕だから。迷子になっちゃったんだから」

「悪かったよ。坊主。癖なんだよ。嘴が勝手に動くんだ。話をもどすけどよ、その事件の後、中堅幹部やチンピラどもが謀反をおこした」

「まあ、そうなりますよね、ふつう」適当な言葉でパルが反応する。

「黙ってるよポケガラス。で、だけど、サムリ自ら、池袋、渋谷、上野、その他もろもろで大いくさをおっぱじめた」

「いやあ凄かったスよね。3日も経たないで裏切り野郎は皆殺し」

「このポケガラス！おいしいところ持つていくなよ。戦闘シーンをダイナミックかつスリリングに語るつもりだったのに」残念そうな

ルクはパルをひっぱたいた。

「ウヅキ一派も静観するだけだったし。他の一族もこのいくさには冷淡だった。結局サムリの支配は揺るがない」久々にキオが発言した。

「で、よお。俺らはどうすんのがいいってんだよ。キオ」

「ほんと、サムリたち今ごろ血まなこになってこの子を探しているはずよ」

「わかってるよ。サムク。わかる範囲で良いから教えてくれないか？」「うなずくサムク。

「まず、君はどこに住んでいるんだい？」

「すみかを教えちゃだめだって言われてる」ルクがつまらなそうにかあと一声

「言います。グリンヒルシティーです」当のサムクも仕方がないことだと割り切つて、すみかを教えた。

「いいとこ住んでら」またもつまらなそうに一声あげるルク。

「かくれんぼしてて、いつまでたっても見つけにこないから、怖くなって戻ろうとして、そしたら見覚えのないところに来ちゃって、誰か知ってるひともいなくて」

「いくらなんでもグリンヒルぐらい見えるだろうや。高いたてものなんだしよ。それを目印にすりゃなんてこっちゃんえだろうよ」「つまらなそうにルクが一声。

「そうなんですけど。だから、高いたてものに飛んだんです。でも違うマンションだったんです」つまらなそうにルクが一声。リリースがついに、

「さつきから、かあかあうるさいわ。そんなにつまらなければ出て行ったらどうなの」「こぜりあいが始まる。パルはパルでビルを煽つて面白がっている。

「もう、みんな！大事な話をしているんだよ」「しずかになった。ひと呼吸おいて質問を続けるキオ。

「…同じようなたてものがいっぱいあるから間違うのも仕方がない。

でもなんで誰かに話しかけなかったの？いたるところに仲間がいた  
だろう」

「なんだか怖くて。みんな仲間のはずなんだけど、話しかけられなくて」リリスが睨みをきかせているもので、ルクもちゃちゃを入れられない。

「じゃあ、迷子になってから初めて話したのは」

「キオさんとルクさんです」すまなそうにサムクが言った。

「まあすみかが分かれば話ははいスねその送ればおいまいスね」  
いかげんな結論を口に出すパル。アルコールがまわっているのか、  
発音が変わる。

「そんなに簡単じゃないよ…」キオは水のはいったボトルを銜え、  
パルに浴びせる。ヒヤッとなるパル。

「酔いはさめたかボケガラス？」ルクもついでにもうひと浴びせ。

「もう、びちゃびちゃ。パル。ちゃんと拭いてね」リリスがぞうきを  
をポイと投げた。

「とにかく、揉め事はごめんだ。仲介人をおして帰してあげよう  
…パル！」

「んあ、はい？つとつと」銜えているぞうきを落とさずに、返事を  
しようというむなししい努力をしているパルに、サムクも思わず笑  
みがでる。

「えーと…」

「なんででしょうか？」銜えながら話すことを諦めたようだ。

「君は顔が広い。サムリ一族寄りの知り合いもいるだろう。できる  
だけ信頼できるひとに事情を話して交渉に当てる」

「そうですね。それが良いですね。さすがだなあキオさんは」

「お世辞はいいよ。そうなれば…」キオはパルに伝えるべきことを  
考えた。

「ほんとにすみません。みなさん」うつむくサムク。

「そんなにへこむことないわ。君も大変なんだから」そうだそうだと、  
みんなもなだめる。いつのまに、外は紅に染まり始めていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9707g/>

---

キオとルク

2010年10月22日00時37分発行